

## カオス\*ラウンジ

**01. 室内劇 se cure | 2019年**

「セキュリティ」をテーマとした新作。2015~2017年に福島県いわき市で開催した「市街劇」を変奏し、「室内劇」として制作。会場内に配置された複数のテキスト(a-g)で構成されている。(引用：宮沢賢治『注文の多い料理店』、新潮文庫 国土交通省HP「鉄道運輸規定の一部を改正する省令」)

### 梅沢和木

**02.Summer clouds | 2019年**

「雲Cloud」と「群衆Crowd」をモチーフにした新作。夏空に浮かぶ雲と、不吉な爆煙。祝祭に集う群衆と、災害にみまわれ避難する群衆。「クラウド」という音によって様々なイメージをつなぎ、災害と祝祭の風景を描き出す。

### 磯村暖

**03. เปรตไปเมือง** (プロテストする地獄の亡者、ある時にはプロテストしたので地獄に落ちた亡者) + **เฑ็ควง** **ฮิต** **ดอท** **0a**, **中川春香**, **他8名による地獄の亡者の彫像群 | 2019年**

ブラカードを持ってデモ行進しているのは、地獄の亡者たちである。タイの「地獄寺」では1970年代以降に、このようなコンクリート彫刻による亡者像が定着した。亡者たちが掲げる抗議は、「罪」のレッテルを貼る側に対する異議申し立てであり、歓迎の言葉は、亡者たちが私たち似姿でもあることを伝えている。

### 宇川直宏

**04.A Series of Interpreted Catharsis episode2 – earthquake | 2007年**

筑波の地震研究所との共同制作で、1989年のサンフランシスコ地震（ロマ・ブリータ地震）と1995年の阪神淡路大震災の揺れをシミュレーションし、写真と映像に記録した作品。科学的なシミュレーションと、物語的な演劇装置によるシミュレーションが重なり合う、新たな災害の表象。

### 大山顕

**05.Firewall | 2019年**

隅田川沿いにある「白鬚東アパート」は、高さ40mの棟が1.2kmにわたってつながっており、それ自体が巨大な「防火壁」となっている。関東大震災の火災で多くの人命が失われたことを教訓に作られたこの巨大ファイアウォールは、災害の記憶によって生まれた都市の風景である。

### 三上晴子

**06. 《Bad Art For Bad People》で使用された赤いケーブル | 1986年**
**所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター**
**ポートフォリオ | 1986年**
**所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター**
**Iron Plant | 1984-85年**
**所蔵：多摩美術大学アートアーカイヴセンター**
**(P3 art and environment より寄贈)**

1984年から情報社会と身体をテーマとした作品を発表し、国内外で活躍してきた三上は、2015年1月に急逝。1986年の《Bad Art For Bad People》は、当時NTTが大量に破棄した地下電話線を用いたインスタレーションで、本格的な情報社会化を目前に控えた都市の身体、神経網を表現した重要な作品である。本作はもう現存しないが、多摩美術大学アーカイヴセンターに保存されていた当時のケーブルをお借りし、展示した。

### 寺山修司

**07. 「市街劇ノック」地図 | 1975年**
**所蔵：株式会社テラヤマワールド**

### カオス\*ラウンジ

**08. 「市街劇 怒りの日」地図 | 2015年**

1970年代に入って、寺山は「市街劇」という新たな演劇の形式を発明した。市街劇は「追放された百万人のびっこ、鍛冶屋、魔法使いたちを呼び戻し、そこに新たな出会いの機会を生成する」という寺山の演劇論を実践するものであり、現実の都市に虚構を重ね合わせることによって、想像力による現実への介入を試みた。市街劇「ノック」はその代表作である。カオス\*ラウンジは、東日本大震災後の福島県いわき市を舞台に、寺山の方法論を応用して新たな市街劇をおこなった。被災地でおこなう市街劇は、震災後の現実に対する想像力による介入となり、災害、慰霊、復興といった文脈を抱えることになった。

## カオス\*ラウンジ

**09. 東海道五十三童子巡礼図 | 2019年**

2019年7月18日、京都市伏見区の京都アニメーション第1スタジオで発生した放火事件を受けて制作された絵画。現実と虚構（アニメ）を橋渡しすることに尽力した京都アニメーションに対して、虚構のなかに、現実の暴力（危険物）が持ち込まれてしまった。現実の暴力によって壊されてしまった虚構を回復し、虚構と現実の関係を問い直すために、東京と京都をつなぐ「東海道」と「善財童子」を描いた。制作は、藤城嘘と名もなき実昌が指揮を執り、15名の絵師たちの協力のもと進められた。参加絵師：内田ユイ、梅ラボ、川上喜朗、ク渦群、cottolink、杉本憲相、都築拓磨、TYM344、名もなき実昌、宏美、藤城嘘、BeBe、堀江たくみ、三毛あんり、宮下サトシ、×□、mos

### 梅田裕

**10.53 つぎ | 2019年**

床に並べられた白い座布団は、全部で 53 個ある。座布団のなかには、東海道の53 箇所の宿場で採取された「土」が入っており、京都の方向へ向けて配置されている。※本作は、座布団の上を歩いていただくことができます（お砂踏み）。その際には、靴を脱いでくださいますようお願いします。

### EVERYDAY HOLIDAY SQUAD (SIDE CORE)

**11.RODE WORK | 2017年**

**意味のない徹夜 | 2019年**

《RODE WORK》は、東日本大震災で津波の被害を受けた、宮城県石巻市のスケートボーダーたちと共同で制作した作品である。夜間道路工事現場の機材や照明と組み合わせた、一晩限りの工事現場のようなスケートパークで、作業服を着て滑るスケーターたち。そこにオーバーラップする防潮堤や工事現場の風景は、震災の傷跡であると同時に、そこが彼らにとつての「遊び場」であることを示している。震災と復興の狭間にあつて、自ら表現の場を見出していく「ストリートの初期衝動」が、そこにはある。

### 会田誠

**12. MONUMENT FOR NOTHING IV (2019 ver.) | 2012-2019年**

巨大な壁として立ち上がっているのは、東日本大震災で被災し、水素爆発を起こした福島第一原発建屋を描いたパネルである。よく見るとその表面は、東日本大震災と原発事故について言及した Twitter 上のさまざまな「つぶやき」によって覆い尽くされている。巨大な災害を目の当たりにした人びとがネット上に書きつけた、たかさんの「言葉」がそのまま「モニュメント」と化している。

## アヤズ

**13. 「ニシポイ」 | 2005-2019年**

今回、鉛屋には「地下鉄サリン事件以後、一時的に制作を休止したことについて」というテーマで新作を依頼した。その結果、①会場の床と天井を110cm四方切り取る（東京拘置所の「落とし板」のサイズ）。②骨壺を持ち込む。③2005年の「バングント」展で発表した作品の再展示（楳木野衣が「サラギノ」名義で寄稿したテキストと、日本列島を消去した気象映像）。④1997年4月24日の第34回公判における麻原彰晃の発言。⑤現在の上九一色村の風景。⑥鉛屋法水自身が会場に居ること。主にこの6つによって構成される作品となった。6つの要素は必ず全て揃うわけではなく、また会期中に変更される可能性もある。

### 八谷和彦

**14. 見ることは信じること | 1996年**

1995年の阪神淡路大震災をきっかけにおこなった「メガ日記」プロジェクトをもとにした作品。「メガ日記」は、100人が100日間日記をつけ、パソコン通信上で交換するというプロジェクト(実際には1回目は約140名、2回目は約250名の参加者があった)で、ニフティサーブやインターネットで日記が毎日収集・公開された。災害をめぐる人びとの言葉を、ネット上の「日記」という場所をつくることで可視化し、アーカイブした、最初期のメディア・アートの名作である。

# SiteA「災害の国」

※本展は2会場構成です。Site Bの入り口は、銀座方面に25mほど直進した左手にあります。



### 竹内公太

**15. 盲目の爆弾 | 2019年**

第二次大戦末期、日本軍は「風船爆弾」という特殊な兵器を開発し、アメリカ本土攻撃を試みた。和紙とこんにやく糊などでできた風船は、劇場などの広い室内空間を利用して手作業で作られた。完成した風船爆弾およそ9300発は、千葉、茨城、福島の海岸近くにある基地に集められ、空に放たれた。竹内は、ワシントンとシアトルにある国立公文書館の資料などを頼りに、風船爆弾が着弾した地を訪ね、この「盲目の爆弾」が見ることのなかった風景を、映像化した。

### 高山明

**16. 個室都市東京 2019 | 2009-2019年**

「個室ビデオ店」や「ネットカフェ」を模したブースで見ることができるのは、街ゆく人びとへのインタビュー映像である。本作が最初に発表されたのは2009年。ちょうどその1年前に秋葉原通り魔事件が起こり、「ネットカフェ難民」という言葉が話題になった。社会から疎外された人びと、居場所がないと感じる人びとの「避難場所」としての「個室」。今回は新たなインタビュー映像を加え、2019年バージョンとして展示した。

### 中谷芙二子

**17. 水俣病を告発する会——テント村ビデオ日記 | 1972年**
**所蔵：東京都写真美術館**

1960年代後半に発売されたポータブルビデオカメラは、映像の撮影、編集、発表まですべて個人で行なうことができるという点で、世界中の表現者たちに衝撃を与えた。中谷は、この民主化された映像ツールである「ビデオ」を手に、東京のチッソ本社前で座り込みをする人びとのなかへ入ってゆく。中谷のビデオは、人びとの主張を代弁するわけでも、劇的なシーンを撮るわけでもなく、ただ「環境の一部」として、その風景を記録した。

### 渡邊英徳

**18. 「忘れない」震災犠牲者の行動記録 | 2019年**

渡邊はこれまで、「ヒロシマ・アーカイブ」や「東日本大震災アーカイブ」など、戦争や災害の被害者の記録を、デジタルアース上にアーカイブするプロジェクトを続けてきた。本作は、岩手県における震災犠牲者の「地震発生時」から「津波襲来時」までの避難行動をまとめたデジタルアーカイブである。渡邊は、本来は声も身体も持たないデータを紡ぎ、震災犠牲者の行動記録として可視化する。

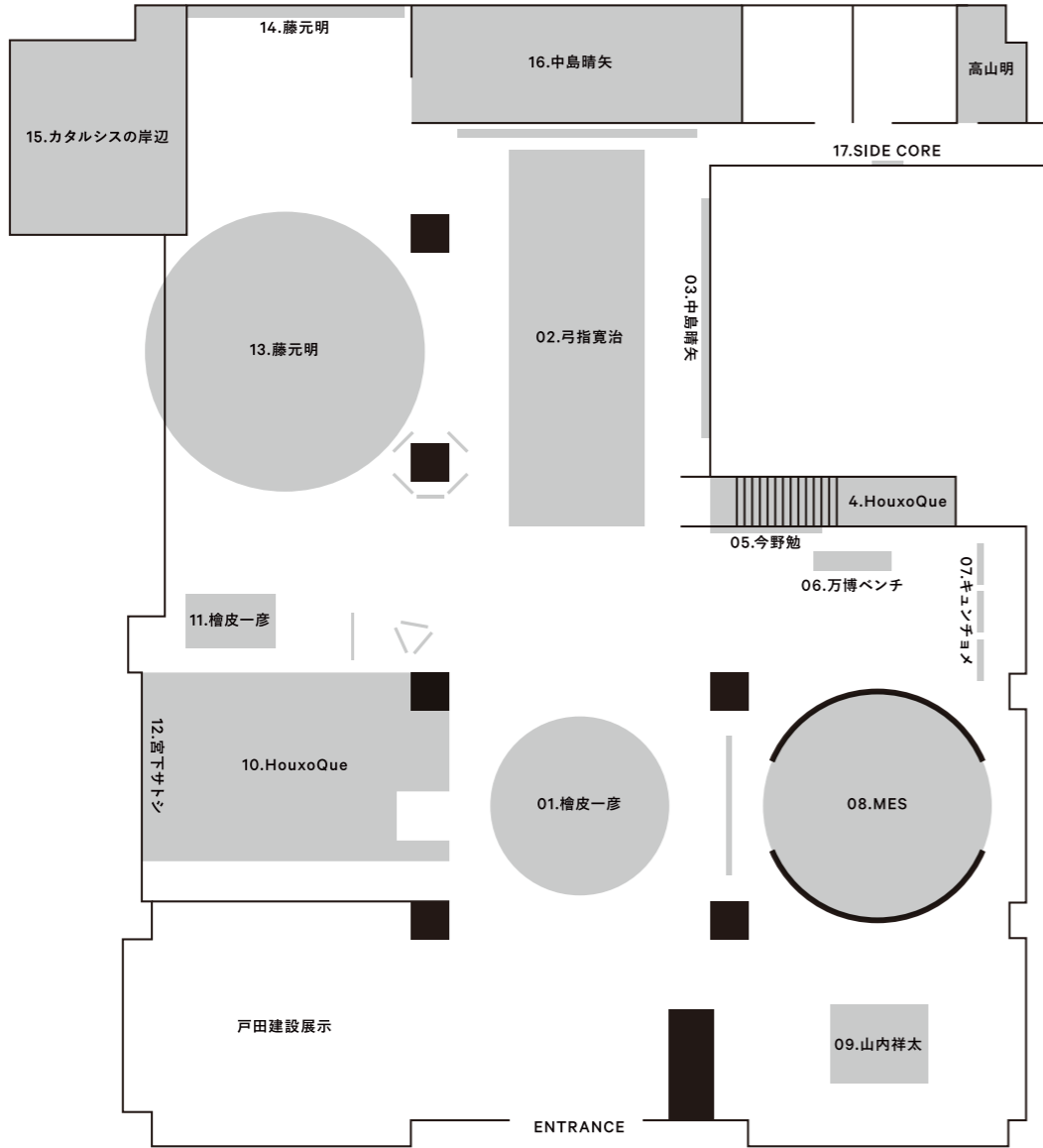
### たかくらかずき

**19. 摩尼遊戯 TOKOYO 神仏習合 godda mix | 2019年**
**開発：vitte**

コンピュータ・ゲームの起源が「戦争シミュレーター」であることはよく知られている。たかくらはその死のテクノロジーを反転させ、「仏教シューティングゲーム」という新ジャンルを生み出した。プレイヤーの自機は仏僧であり、襲いかかる怨霊=死者たちを、念仏によって成仏させてゆく。本作は、2015年にカオス\*ラウンジが開催した「市街劇 怒りの日」の出品作をバージョンアップしたものである。

## SiteB「祝祭の国」

※本展は2会場構成です。Site Aの入り口は、日本橋方面に25mほど直進した左手にあります。



### 檜皮一彦

**01.hiwadrome : type THE END spec5 CODE : invisible circus | 2019 年**  
協力：協力：株式会社コトブキ、コトブキシーティング株式会社

**11.hiwadrome : type THE END spec5 CODE : radical dreamers**

白く塗られた車椅子を積み上げ、大量の白色 LED によって発光させた「塔」。この塔の前にあるのは、岡本太郎本人が造形した「太陽の塔」顔部分の模型。1970 年の大阪万博で「太陽の塔」顔部分の施工を担当した「株式会社コトブキ」が所蔵しているものをお借りした。一見すると1970年の「反復」「再来」のように見えるが、よく見れば、そこには決定的な「ズレ」がある。

### 弓指寛治

**02. 黒い盆踊り | 2019 年**  
白い馬 | 2019 年

発光する車椅子の「太陽の塔」の裏側にあるのは、盆踊りを踊る人びとの列である。盆踊りもまた「祝祭」であり、私たちにとって最も身近な祝祭のひとつだろう。しかし、五輪や万博が「生者」のための祝祭なら、盆踊りは「死者」のための祝祭である。太郎の「太陽の塔」の裏側には「黒い太陽」の顔があったが、弓指はそれに対応させるように、影としての盆踊りを配置した。発光する塔に照らされた人びとは、生きて、死者のために踊る。しかし裏に回ると、塔は爆心地に変わり、人びとは炎に包まれ、焼かれている。影の道の先には、太郎の従軍時代のエピソードをもとにした《白い馬》がある。太陽の塔の影は、死者たちとともに、太郎自身の戦争の記憶にもつながっている。

### 中島晴矢

**03. バリー・トゥード in ニュータウン ーエキスポー | 2018 年 | 映像 22 分 44 秒**  
**16.Shuttle Run for 2021 | 2019 年 | 映像 10 分 04 秒**

90 年代の『ケンドー・ナガサキのバリー・トゥード in 商店街!』のオマージュとして、2014 年から制作しているシリーズの完結編。プロレスラーに扮した中島は、巨大な祝祭の跡地につくられた日常＝「ニュータウン」を舞台に、自らの身体を賭して「バリー・トゥード＝なんでもあり」のバトルを繰り広げる。それはレスラーどうしの闘いではなく、どんな祝祭も呑み込んでしまう、分厚い日常との、勝ち目のない闘いである。

### Houxo Que

**04.un/real engine | 2019 年**

祝祭の足元から、静かに迫る黒い水。本展における祝祭と災害の関係を示す、象徴的なインスタレーションである。「ゼネコンの地下を水没させる」というアイデアからはじまった作品だが、解体前とは言え、まだ本社機能があり、テナントも入っているビルの一部を水没させるために、入念な計画と調整を要した。結果的に、絶対に水漏れがないよう、構造計算や防水対策を繰り返し、最も「安全」に配慮した作品となった。

### 今野勉

**05. 今野勉 | 日本万国博覧会 電気通信館展示プランに関する資料 | 1969 年**

1970 年の大阪万博において、電電公社（現 NTT）のバビリオン「電気通信館」の展示プロデューサーを務める予定だった、今野勉による展示プランの資料。諸事情により、今野のチームは途中で辞退することとなり、幻の展示プランとなった。今野のプランは、東京の霞が関ビル前、京都の西陣織職人の仕事場、種子島の漁港の3ヶ所にカメラを設置し、電電公社が持つ全国のマイクロフェーブ網を使って、ひたすらその場所の日常を生中継し続ける、というものだった。「Tele - vision＝遠くを見る」というテレビの本質に回帰しようとする今野のプランは、「動画の時代」「配信の時代」である現代の想像力を先取りする、きわめて先駆的なものであった。

### 万博ベンチ

**06.1970 年 所蔵：株式会社コトブキシーティング**

「ストリートファニチャー（街具）」とは、公共空間において、人びとが集い、憩うことができるようにサポートするものを指す。日本でこのコンセプトが本格的に導入されたのは 1970 年の大阪万博である。万博では、大量の観客が動員される。観客を収容するためには各バビリオンだけでは足りないため、丹下健三や磯崎新らの提案によってストリートファニチャーが導入されたのである。コトブキの「万博ベンチ」は、万博のために作られたストリート・ファニチャーのなかで最もポピュラーなもので、万博が終わったあとも、全国の公共施設で使用され続けた。

1970 年の祝祭では、この万博ベンチのような数々の作品によってストリートが開かれ、人びとを受け入れた。来るべき祝祭において、はたしてこのような作品は生まれるだろうか。

### キュンチョメ

**07. 日陰の太陽 | 2015 年**  
行方不明の太陽 | 2015 年

北を向いているため、一日中まったく陽が当たらない「太陽の塔」の裏の顔、「黒い太陽」に、鏡を使って太陽光を反射させることで「目」を入れるパフォーマンス《日陰の太陽》と、全盲の人たちの瞳に映る太陽の姿を捉えた《行方不明の太陽》を、本展のために組み合わせ配置した。  
※作家による解説キャプションも参照のこと

### MES

**08.HOTBEDS/ 温床 | 2019 年**

日本におけるクラブカルチャー前身である「ディスコ」カルチャーは、1964 年の東京五輪の頃に輸入され、1970 年の大阪万博以降に最盛期をむかえる。一方、現在のクラブカルチャーは風営法によるクラブ規制によって萎縮し、五輪、万博にむかって「踊れない国」となりつつある。クラブ規制をテーマとしてきた MES が、反復する五輪、万博の歴史のなかで、「ディスコ」の隆盛と「クラブ」の規制が対照的になっていることに着目する。

※作家による解説キャプションも参照のこと

### 山内祥太

**09.Lonely eyes | 2019 年**

ヘッドマウントディスプレイによる VR 体験は、視界が覆われることによって外界から隔離され、自らの身体を置き去りにして VR 空間に没入する。山内は、私たちがここではないどこかへ没入し、凝視する時に現れる、置き去りにされた身体性それ自体を「彫刻」化しようと試みる。

### Houxo Que

**10.un/breakable engine | 2019 年**

### 宮下サトシ

**12. 爆撃器 | 2019 年**  
波魂像 | 2019 年

Houxo Que による解体された茶室のインスタレーションは、来るべき祝祭にむけて、ますます流布されることになる典型的でオリエンタルな日本イメージに対する「Bomb」である。一方、茶室の押し入れに置かれた巨大な黒い器は、一度瓦礫にして焼成した陶片を再構成し、漆喰で固めたもの。

### 藤元明

**13. 幻爆 | 2017 年**

**14.2026 | 2019 年**

円形の鉄パイプと銀色のテープでつくられたシンプルなオブジェが、強い光によって、着弾の瞬間を幻視させる装置に変わる。大友克洋の『AKIRA』から着想を得たという本作は、64 年五輪と 70 年万博に先立つ、最大の災害である原爆を想起させる。そして、会場を解体する際に出た瓦礫を用いて作られた「2026」は、祝祭の本質からどこまでも離れてゆく祝祭に対する不安を、ストレートに表している。

### カタルシスの岸边

**15. カタルシスの岸边 | 2019 年**

屋台という形式であらゆる人々のローカルディスクに眠る「死蔵データ」を回収し、販売しているアーティストグループ、カタルシスの岸边は今回、「祝祭」をテーマにした会場から出た瓦礫が山のように積みれ、押し込められた一室を使い、回収した死蔵データで満たした。解体され、破棄されてゆく瓦礫と死蔵データはともに、忘れられた記憶装置であり、祝祭の裏側に作られたこの密室で、ひっそりと再生されるのである。※作家に解説キャプションも参照

### EVERYDAY HOLIDAY SQUAD(SIDE CORE)

**17. Memorial Rebirth | 2017 年**

このキース・ヘリングの落書きは、渋谷の某所に今も残されている。とあるグラフィティライターが重なりあう偶然の中で発見したもので、公には知られておらず、グラフィティライター達の中だけで秘密裏に共有される「街の記憶」である。この作品は、その落書きをトレーシングペーパーでなぞり、反転させている。作品年号は 1986 年で、ポップショップをオープンする視察の為に来日したキースヘリングが描いたものと記録から判明している。公に知られてしまえば、たちどころに切り取られ、売り飛ばされてしまうこの落書きを、秘密にしたまま記憶し続けるために制作された。